

否定される消極性——〈求塚〉の女——

三宅 晶子

世阿弥がどういふ女性観を持ち、どういふ女を造型しているのか、そのつもりで世阿弥の創り出した女を眺めてみると、なかなか面白い一面が見えてくる。松風・村雨・松浦佐夜姫・浮舟・江口・檜垣・求塚の菟名日処女・百万・桜川の狂女・花筐の照日の前・班女・井筒の女、そして砧の女。

この中で最も異色なのは〈求塚〉の菟名日処女であろう。この曲は、かつては観阿弥作と考えられてきたが、最近では観阿弥作曲の謡物を使用した世阿弥新作であるとするのが、定説化しつつある(表章氏『能楽史新考(二)』「作品研究〈求塚〉」補説。昭和六一年三月、わんや書店)。

〈求塚〉は、現存する曲の中でも一番恐ろしい地獄の責め苦が描かれている。しかも他の世阿弥作品と違って、成仏はおろか、その可能性さえ示されずに終わってしまうのである。この曲の地獄観はなかなか意味深長である。彼女は二人の男から同時に愛され、どちらかを選ばなくて自ら命を断つたにも関わら

ず地獄に墮ちる。彼女に原因はないのに、なぜ地獄に墮ちて醜く苦しまなければならぬのか。従来問題とされてきたことである。

この能の題材は、『万葉集』の田辺福麿歌(過戸屋処女墓時作歌一首並短歌 一八〇五〜〇七)や、高橋虫麿歌(見菟原処女墓歌一首並短歌 一八一三〜一五)、大伴家持歌(追同処女墓歌一首並短歌 四二三五〜三六)、そして『大和物語』(一四七)にも見える、有名な話であった。西村聡氏がこの能の典故について、「人物呼称の表記を『万葉集』に、また男二人の相拮抗する状況は『大和物語』に、それぞれ依拠」すると指摘されたりして、

しかも文学的達成の核となる部分で先行諸文献と相違するのは、仏教に対する性差別への疑念の表明をはじめとする主体的・検証的な姿勢であり、それは中世という時代を反映しつつそれを突き抜けているとされる(『求塚』における典故の意味『文学語学』昭和五八年四月)。世阿弥に、仏教における性差別への疑念があったとは考えにくい、先行

論文の丁寧な紹介と、能における典故と独自の問題を論じられている点が、注目される。

〈求塚〉では、男性二人が同じような人間で、そのために女は一方を選ばなかったという設定で、これは『大和物語』と同様である。

その男ども、年・齢・顔容貌・人のほど、たゞ同じばかりなむありける。……心ざしの程だにたゞおなじやうなり。暮るればもるともに來あひぬ。物をこすれば、たゞ同じやうにをこす。いづれまされりといふべくもあらず。

『大和物語』では同一性がことさら強調されている。困り果てた女の親は、生田川の水鳥を射当てた方に娘をやろうと提案するが、二人は同じ水鳥を同時に射当ててしまう。同じ条件の男に対して、女はどちらにも想いがかげず、従って一人を選ぶことができない。ところが『万葉集』高橋虫麿の反歌によると、
墓上之つみのかみ木枝きえだ驍さう有あり 如聞きこえ陳努ちんぬ壯子さうし爾之に
依部よべ家長ちか良信よしのぶ母はは (新編国歌大観による)

女は血沼丈夫の方が好きであったという伝承が、当時あったことがわかるのである。西村氏の御指摘にあるように、能では女の名前を『万葉集』から取っておりながら、男の同一性による選択不可能という状況は『大和物語』に基づく。女の気持ちが一方向に傾いているか否かは、能作上の意図と、密接な関係がある

のではなからうか。世阿弥はあえて『大和物語』の方を選んで、と考えられるのである。

『大和物語』の女は、一見純情な乙女であるが、本当は能動的に生きることの出来なかつた愚かな娘である。二人の男性は同じことしか考えつかず、またできないような、似たり寄つたりの、つまり平凡な男であつた。この物語において鍵となるのは、女の優柔不断さよりは、むしろ男の平凡さにあるのではなからうか。男の没個性が悲劇の原因なのである。女は、平凡な男の愛など毅然として拒絶するか、あるいは何か現実的で打算的な理由を付けて一方を選択するしかない状況に追い込まれる。いずれの道を選ぶにしても、選ぶことで人生を賭けることになる。『大和物語』の女はそういう敵しさと直面せずに、自分一人が犠牲になつたつもりで、誰をも傷つけまいとして、人生から逃避する。『大和物語』の作者は、そういう女を可憐と見ているようだが、それは実は自己陶醉の極致であるから、結局みんなを傷つけてしまうのである。

ところで『源氏物語』の浮舟も、二人の男性に愛されて死を選ぶという意味では、同種の素材をもとに作られている。ところが浮舟は一人を選べなかつたのではなく、匂宮を選んでしまったために死を決意する。そして入水の瞬間に、素晴らしく魅力的な女性に生ま

れ変わるのである。損得抜きで男に惹かれてしまえる素直な感性、薫を裏切つた自分が許せない潔癖さ、恋の成就のために死を選ぶ行動力。移り気でもいい加減な匂宮や、愚図で冷たい薫など足元にも及ばない、豊かな内面を持つている。所詮取るに足りない男と関わつたための不幸で、そういう意味では『大和物語』の女と共通している。しかし紫式部は、「選んでしまった女」とすることによって、取るに足りなくても男の愛に縋るより生きる術のなかつた、平安貴族の女の悲劇を描き出した。式部は菟名日処女伝説を、すっかり新しい物語に生まれ変わらせたわけである。

そしてまた能(求塚)も、原話には描かれていない恐ろしい地獄に堕ちた姿を描くことで、『大和物語』の話に別の意味を持たせた。好きな人を選べない、人生を選べないなどという消極的な人間を、中世の人、特に世阿弥は容赦しないのである。世阿弥の創り出した一連の女人像を眺めてみると、それが納得できる。物狂の女達は、大切な人を探すために、自らの安全性など考慮に入れず、積極的に行動するし、(松風・井筒・碓)の女達は、自らの恋の想いから目を反らすことなく、少しのごまかしもなく、純粹に自分の世界に生きている。そういう女達は、皆一途で、一種強烈な精神力を持たされ、美しく造型されてい

る。(求塚)は、女が地獄で責められる所を見せるために作られた能である。女は地獄に墮とすべく意図して選ばれているのであり、世阿弥の場合、こういう自分の人生に対して消極的な生き方をする女は、苦しめたくなるのではなからうか。(綾鼓・恋重荷)の女御などもその好例である。

ちなみに横尾元久作詞、世阿弥作曲の(浮舟)を、世阿弥は非常に高く評価し、随分気に入っていたらしいが(申楽談儀)、浮舟はなんと都率天に生まれ変わる。

(目白学園女子短期大学助教)